

# 2011年度 関数論2 No.6

桂田 祐史

2011年10月18日

## 1 問3の解説

**問3** (1) 次の各関数を0のまわりでテーラー展開(冪級数展開)し、収束半径を求めよ。

(a)  $\frac{1}{z+4}$  (b)  $\frac{1}{(z-i)^2}$  (c)  $\frac{1}{z^2+1}$  (d)  $\text{Tan}^{-1}z$  (e)  $\frac{z^3-3z^2-z+5}{z^2-5z+6}$

((b),(d)は微分積分を考えてみる。(e)は部分分数分解すると簡単になる。)

(2)  $\frac{1}{z+3}$  を1のまわりでテーラー展開し、収束半径を求めよ。

**解答** (1) (慣れないうちは無理をせず、なるべくゆつくりと式変形する。目標は  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n z^n$  の形にする ( $a_n$  を求める) ことである。)

(a) 等比級数の和の公式を用いて、

$$\frac{1}{z+4} = \frac{1}{4+z} = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{1+\frac{z}{4}} = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{1-\left(-\frac{z}{4}\right)} = \frac{1}{4} \sum_{n=0}^{\infty} \left(-\frac{z}{4}\right)^n = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{4^{n+1}} z^n.$$

収束  $\Leftrightarrow$  |公比|  $< 1 \Leftrightarrow \left|-\frac{z}{4}\right| < 1 \Leftrightarrow |z| < 4$  であるから、収束半径は4.

(b) 等比級数の和の公式を用いて、

$$\frac{1}{z-i} = \frac{1}{-i+z} = \frac{1}{-i} \cdot \frac{1}{1+iz} = i \cdot \frac{1}{1-(-iz)} = i \sum_{n=0}^{\infty} (-iz)^n = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n i^{n+1} z^n$$

である。収束  $\Leftrightarrow$  |公比|  $< 1 \Leftrightarrow |-iz| < 1 \Leftrightarrow |z| < 1$  であるから、収束半径は1. これから、

$$\begin{aligned} \frac{1}{(z-i)^2} &= -\left(\frac{1}{z-i}\right)' = -\left(\sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n i^{n+1} z^n\right)' = -\sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n i^{n+1} n z^{n-1} = \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} i^{n+1} n z^{n-1} \\ &= \sum_{m=0}^{\infty} (-1)^m i^{m+2} (m+1) z^m = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n i^{n+2} (n+1) z^n = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^{n-1} i^n (n+1) z^n. \end{aligned}$$

収束半径は項別微分しても変わらないので、1.

(c) 等比級数の和の公式を用いて、

$$\frac{1}{z^2 + 1} = \frac{1}{1 + z^2} = \frac{1}{1 - (-z^2)} = \sum_{n=0}^{\infty} (-z^2)^n = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n z^{2n}.$$

$a_n$  を

$$a_n = \begin{cases} 0 & (n \text{ は奇数}) \\ (-1)^k & (n = 2k (k = 0, 1, \dots)) \end{cases}$$

で定めると、

$$\frac{1}{z^2 + 1} = \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^n.$$

収束  $\Leftrightarrow$  |公比|  $< 1 \Leftrightarrow |-z^2| < 1 \Leftrightarrow |z| < 1$  であるから、収束半径は 1.

(d)  $(\text{Tan}^{-1}z)' = \frac{1}{z^2 + 1}$  である。

そこでノーテンキにやると、

$$\text{Tan}^{-1}z = \int \frac{1}{z^2 + 1} dz = \int \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n z^{2n} dz = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n \frac{z^{2n+1}}{2n+1}$$

となるが、これは途中の正当化が少し難しい。

- 領域  $D$  で定義された正則関数  $f$  に対し、 $F'(z) = f(z)$  ( $z \in D$ ) を満たす  $F$  が存在するならば、 $\forall a, z \in D$  に対して、

$$F(z) = F(a) + \int_a^z f(w) dw.$$

$\text{Tan}^{-1}z$  は 0 の近傍で正則であるから、 $z = 0$  のまわりで Taylor 展開できる:

$$\text{Tan}^{-1}z = \sum_{n=0}^{\infty} b_n z^n \quad (|z| < \exists r).$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} (n+1)b_{n+1}z^n = (\text{Tan}^{-1}z)' = \frac{1}{z^2 + 1} = \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^n.$$

ただし  $a_n$  は (c) で出て来たものである。ゆえに

$$(n+1)b_{n+1} = \begin{cases} 0 & (n \text{ は奇数}) \\ (-1)^k & (n = 2k (k = 0, 1, \dots)). \end{cases}$$

$$b_n = \begin{cases} 0 & (n \text{ は偶数}) \\ \frac{(-1)^k}{2k+1} & (n = 2k+1 (k = 0, 1, \dots)). \end{cases}$$

- (e)  $f(z) := \frac{z^3 - 3z^2 - z + 5}{z^2 - 5z - 6}$  とおく。  $f(z)$  の分子  $z^3 - 3z^2 - z + 5$  を分母  $z^2 - 5z - 6$  で割ると、商  $z + 2$ , 余り  $3z - 7$  であるから、

$$f(z) = z + 2 + \frac{3z - 7}{z^2 - 5z - 6}.$$

右辺第3項の分母は  $z^2 - 5z - 6 = (z - 2)(z - 3)$  と因数分解できるので、

$$\frac{3z - 7}{z^2 - 5z - 6} = \frac{A}{z - 2} + \frac{B}{z - 3}$$

を満たす定数  $A, B$  が存在する。これから  $A = 1, B = 2$ . ゆえに

$$f(z) = z + 2 + \frac{1}{z - 2} + \frac{2}{z - 3}.$$

$z + 2$  の Taylor 展開はそれ自身である。

$$\frac{1}{z - 2} = \frac{1}{-2} \cdot \frac{1}{1 - \frac{z}{2}} = - \sum_{n=0}^{\infty} \frac{z^n}{2^{n+1}} \quad (\text{収束} \Leftrightarrow |z| < 2).$$

$$\frac{1}{z - 3} = \frac{1}{-3} \cdot \frac{1}{1 - \frac{z}{3}} = - \sum_{n=0}^{\infty} \frac{z^n}{3^{n+1}} \quad (\text{収束} \Leftrightarrow |z| < 3).$$

$f(z)$  の  $z = 0$  のまわりの Taylor 展開の収束半径は、 $0$  と  $\{2, 3\}$  との距離  $2$  である。そして、

$$\begin{aligned} f(z) &= z + 2 - \sum_{n=0}^{\infty} \frac{z^n}{2^{n+1}} - 2 \sum_{n=0}^{\infty} \frac{z^n}{3^{n+1}} \\ &= \left(2 - \frac{1}{2} - 2 \cdot \frac{1}{3}\right) + \left(1 - \frac{1}{2^2} - 2 \cdot \frac{1}{3^2}\right) z - \sum_{n=2}^{\infty} \left(\frac{1}{2^{n+1}} + \frac{2}{3^{n+1}}\right) z^n \\ &= \frac{5}{6} + \frac{19}{36} z - \sum_{n=2}^{\infty} \left(\frac{1}{2^{n+1}} + \frac{2}{3^{n+1}}\right) z^n. \end{aligned}$$

(授業中に  $\frac{19}{36}$  を  $\frac{25}{36}$  と書いてしまった。)

- (2) 目標は  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n (z - 1)^n$  の形に表すことである。

等比級数の和の公式を用いて、

$$\begin{aligned} \frac{1}{z + 3} &= \frac{1}{(z - 1) + 4} = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{1 + \frac{z - 1}{4}} = \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{1 - \left(-\frac{z - 1}{4}\right)} = \frac{1}{4} \sum_{n=0}^{\infty} \left(-\frac{z - 1}{4}\right)^n \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{4^{n+1}} (z - 1)^n. \end{aligned}$$

収束  $\Leftrightarrow$  |公比|  $< 1 \Leftrightarrow \left|-\frac{z - 1}{4}\right| < 1 \Leftrightarrow |z - 1| < 4$  であるから、収束半径は  $4$ . ■

## 2

**命題 2.1**  $\{a_n\}_{n \in \mathbf{N}}$  を任意の複素数列,  $c \in \mathbf{C}$  とする。  $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n}{(z-c)^n}$  について、次の3つのうちのいずれか1つだけが必ず成立する。

- (i)  $\forall z \in \mathbf{C} \setminus \{c\}$  で収束する。  $0 < \forall R^* < \infty$  に対して、  $|z-c| \geq R^*$  で一様に絶対収束する。
- (ii)  $0 < \exists R < \infty$  s.t.  $|z-c| > R$  で収束、  $0 < |z-c| < R$  で発散。  $R < \forall R^* < \infty$  に対して、  $|z-c| \geq R^*$  で一様に絶対収束する。
- (iii)  $\forall z \in \mathbf{C} \setminus \{c\}$  で発散する。

この命題の証明には、次の補題を用いる (これは関数論1で学んだので、証明は省略する)。

**補題 2.2**  $\{a_n\}_{n \geq 0}$  を任意の複素数列,  $d \in \mathbf{C}$  とする。  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n(w-d)^n$  について、次の3つのうちのいずれか1つだけが必ず成立する。

- (i)  $\forall w \in \mathbf{C}$  で収束する。  $0 < \forall \rho^* < \rho$  に対して、  $|w-d| \leq \rho^*$  で一様に絶対収束する。
- (ii)  $0 < \exists \rho < \infty$  s.t.  $|w-d| < \rho$  で収束、  $|w-d| > \rho$  で発散。  $0 < \forall \rho^* < \rho$  に対して、  $|w-d| \leq \rho^*$  で一様に絶対収束する。
- (iii)  $\forall w \in \mathbf{C} \setminus \{d\}$  で発散する。

**命題 2.1 の証明**  $w = \frac{1}{z-c}$  とおくと、

$$\frac{a_n}{(z-c)^n} = a_n w^n.$$

$a_0 := 0$  とおき、  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n w^n$  について補題を用いると、次の3つのうちのいずれか1つ(だけ)が成立する。

- (i)  $\forall w \in \mathbf{C}$  で  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n w^n$  は収束する。  $0 < \forall \rho^* < \infty$  に対して、  $|w| \leq \rho^*$  で一様に絶対収束する。ゆえに  $\forall z \in \mathbf{C} \setminus \{c\}$  に対して、  $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n}{(z-c)^n}$  は収束し、  $0 < \forall R^* < \infty$  に対して、  $\rho^* := \frac{1}{R^*}$  とおくことで、  $|z-c| \geq R^*$  で  $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n}{(z-c)^n}$  は一様に絶対収束することが分かる。

- (ii)  $0 < \exists \rho < \infty$  s.t.  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n w^n$  は、  $|w| < \rho$  で収束し、  $|w| > \rho$  で発散する。  $0 < \forall \rho^* < \rho$  に対

して、 $|w| \leq \rho^*$  で一様収束する。ゆえに  $R := \frac{1}{\rho}$  とおくと、 $\sum_{n=1}^* \frac{a_n}{(z-c)^n}$  は  $|z-c| > R$  で収束し、 $|z-c| < R$  で発散する。また  $\forall R^* > R$  に対して、 $\rho^* := \frac{1}{R^*}$  とおくとき、 $\rho^* < \rho$  であるから、 $\sum_{n=0}^i n! a_n w^n$  は  $|w| \geq \rho^*$  で一様に絶対収束する。ゆえに  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{a_n}{(z-c)^n}$  は、 $|z-c| \geq R^*$  で一様に絶対収束する。

(iii)  $\forall w \in \mathbf{C} \setminus \{0\}$  で  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n w^n$  は発散する。ゆえに  $\forall z \in \mathbf{C} \setminus \{c\}$  に対して、 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{a_n}{(z-c)^n}$  は発散する。 ■

## 参考文献

[1]